

下川貞文の平良小を中心とした足跡

片岡 慎 泰

The Work of Sadafumi Shimokawa:

Tracing his footsteps in Hirara-Sho

Noriyasu KATAOKA

要 旨

下川貞文という一教育者の半生をたどることで、沖縄における明治新政府による初等教育の一端を明らかにした。沖縄では、その歴史的地理的言語風習的理由で、明治新政府による初等教育の普及が進まなかったが、中でも宮古八島では「旧慣温存」という守旧派の勢力が強く、初等教育の普及が特に遅れた。これまでは、下川凹天という漫画家の父という位置づけでしかなかった貞文を生国の肥後國から始め、沖縄本島を経て、宮古島にわたるまでを論じた。とりわけ、彼の平良小学校時代に着目し、教え子の言説を中心に、下川貞文がこの島の初等教育で果たした決定的役割を示した。

キーワード：下川貞文，下川凹天，宮古島，旧慣温存，平良小学校

はじめに

下川凹天（1892年-1973年）は、大正から戦前にかけて一世を風靡した漫画家である。凹天は故郷への想いを何度も語ったが、とりわけ「夢の琉球島よ！」と郷愁の念にかられ、心から絞り出すかのような記述は強い印象を与える⁽¹⁾。しかし、沖縄の本土復帰の年である1972年、凹天はすでにかんがりの高齢のためか、二度と宮古⁽²⁾の土を踏むことはなかった。

日本アニメーション研究の草分けである山口旦訓（1940年-）氏は、1972年12月中旬に凹天に実際に会っているが、これが、日本最初のアニメーターである凹天をジャーナリストとして取材した最後となる⁽³⁾。

掲載の写真1は、山口氏から提供していただいた最晩年の凹天であるが、凹天の全身が写された未発表の貴重な一枚である。

当時、凹天は野田市の「安楽亭」に住んでいた。この邸宅は、二番目の妻である菅原



写真1 凹天唯一の全身像写真（山口旦訓氏撮影・提供）

なみを（生年不詳-1963年）の病没後、野田醤油（現・キッコーマン株式会社）の第五代社長である茂木房五郎（1893年-1973年）の妹である桑田こと（生年不詳-1994年）が、なみをと洋裁仲間だった縁で、凹天ファンだった茂木房五郎邸の離れを無償で譲り受け、住宅兼アトリエにしていた場所である。凹天はみずから「高等食客」⁽⁴⁾と称していた。

茂木房五郎はかねてから凹天ファンで、野田醤油の教養部長だった1934年に夏期研修を高尾山で開いた。

その際、凹天と鈴木大拙（1870年-1966年）との禅問答が話題になった。

長谷川如是閑（1875年-1969年）は、この研修会における禅問答を後に記録に残した。

「大拙 凹天お前は天（佛のこと聖天弁天のごとく）を凹（へこ）ますのか。

凹天 ノウ、天を大切（大拙）にします」⁽⁵⁾。

さて、下川凹天が生まれた年は、宮古の近代の幕開けともいえるべき人頭税廃止運動が実際に形として始まった時期にあたる。凹天は、燎原の火の如く燃え上がったこの運動の最中に、幼少期を宮古で過ごした。それでも、生まれ故郷である宮古への想いをたびたび口にし、凹天最大のヒット作である『男ヤモメの巖さん』にも「宮古島」を登場させた⁽⁶⁾。しかし、宮古に終生戻ることはできなかったのである。

幼少期を過ごした土地に対する想いは、人それぞれであろうが、私見によれば、凹天にとって、生涯にわたって宮古での思い出は、よほど強烈だったと思われる。しかも、この思い出には、父である貞文とすべて対になっているという特徴が認められる。父の死まで過ごした当時の宮古とは、どのような島であり、また状況であったのだろうか。

残念ながら、凹天の生地である現在の宮古島市においては、日本初のアニメーターでもある凹天、更にその父である貞文の存在はほぼ忘れ去られてしまった感がある。去年は、凹天生誕 130 周年、今年は凹天没後 150 周年という記念の年であるにもかかわらず、凹天資料を所有する博物館や美術館、図書館、またゆかりの土地においても、なにか大きな行事を催すという動きもない。このことは、上述した現況を裏付けている。

本論の目的は、凹天の父である下川貞文が、宮古で教育者としてどのような活動をしてきたかについて平良小學校（以下、平良小と略記する）時代を中心に概観し、明治中期の初等教育が、辺境において実際にどのように行われていたかの一端を明らかにすることにある。

下川貞文について言及される場合、凹天の生誕地である宮古についての幼少期の研究が中心であった。しかし一方で、貞文が宮古で、実際にどのような教育活動をしていたかについて、具体的に言及されたものは断片的であり、その全貌をまとめた研究はなかった。更に、宮古八島に関する資料、ひいては貞文の足跡についての資料が、次々と散逸している。

(1) 貞文が校長になった小学校と凹天の生誕地について

まず、凹天自身の手になる自筆年譜（以下、自筆年譜と略記する）を掲げて、貞文が校長になった小学校や、それと関連する凹天生誕の地に関わるこれまでの先行研究を述べておく。

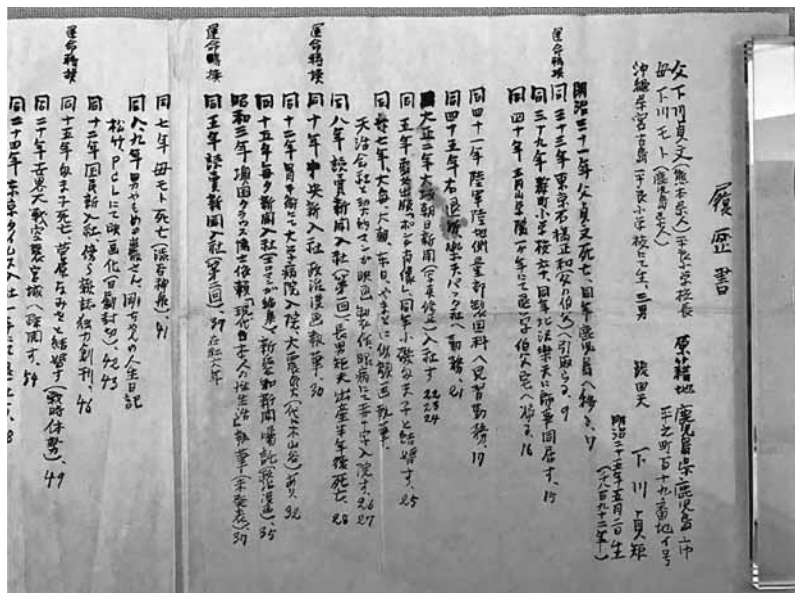


写真 2 凹天による自筆年譜の前半部分（川崎市市民ミュージアム所蔵）

伊藤逸平（1912年-1992年）は、凹天の高弟である石川信介（1906年-1995年）から、直接この自筆年譜を入手した。これに基づき、「下川凹天は熊本県人で平良小学校長下川貞文と母モト（鹿児島島人）の間の三男として明治二十五年（1892年）五月二日に沖縄県宮古島平良小で生まれ、本名は貞矩といった」⁽⁷⁾と、凹天の出身地である宮古を自筆年譜に基づき、「初めて」世に紹介した。「初めて」というのは、例えばすでに、凹天の処女作である『ポンチ肖像』（磯部甲陽堂、1916年）において、岡本一平（1886年-1948年）が「下川凹天氏は琉球の國に生まれた」⁽⁸⁾と、序文に書いているからである。また「夢の琉球島よ！」と述べた日本漫画家連盟機関誌『ユウモア』第二号でも、凹天自身が「私の生地は琉球で沖縄縣宮古島の一孤島なる小学校長の令息として生まれたのであります」⁽⁹⁾と述べた。

これに対して、大城亘武（1946年-）は、『宮古教育誌』（宮古教育誌編纂委員会編、1972年）などの記述に基づき、「伊藤は『平良小学校校長』としているが、これは伊藤の錯誤であろう。下川貞文は平良小学校の校長をしたことがない。もっとも、伊藤逸平は下川凹天の履歴について、石川信介が保持している『本人自筆の年譜』について（以下、凹天自筆、と略記する）を参照しているので、あながち伊藤の錯誤とばかりは言えない。凹天自身の記憶違いか何かであろう」⁽¹⁰⁾と述べている。

確かに、下川貞文が平良小の校長になったことはない⁽¹¹⁾。これに関しては、大城亘武の述べるのが正鵠を得ており、貞文が正式に校長になったのは、実際には新里尋常小学校（現・上野小学校）であった⁽¹²⁾。

また、貞文の経歴に関わる凹天の出生地についても、すでに解決済みとされた問題がある。凹天の出生地については、宮古島説と奄美大島説があった。山口旦訓氏が「明治二十五年、沖縄県宮古島の小学校校長の家に生まれた」⁽¹³⁾と、実際に凹天に書いて書いているにもかかわらず、清水勲（1939年-2021年）は、「凹天は本名を貞矩といい（本名で描いた作品も大正期には見られる）、明治二十五年鹿児島県奄美大島に生まれた。父は教育者」⁽¹⁴⁾と解説した。また、須山計一（1905年-1975年）も、「下川凹天は奄美大島の生れ」⁽¹⁵⁾と述べている。この問題に関して、大城亘武は、「なぜ宮古島ではなく奄美大島とされたが未詳である」⁽¹⁶⁾と述べるにとどまっている。

この二つの出生説について、津堅信之（1968年-）は清水勲に質したところ、奄美大島説は引用の誤りだという清水勲の私信を紹介している⁽¹⁷⁾。そして、渡辺泰（1934年-2020年）は、そのまま大城亘武の論文を踏襲するだけで、凹天の生誕地を「大城の厳密な調査で沖縄県宮古島と確定」と書いている⁽¹⁸⁾。

奄美大島にはそもそも平良小はなく、また貞文が奄美大島で勤めた記録もない。しかし、管見によれば、渡辺の「厳密な調査」という文言だけでは、いささか物足りない。なぜなら、凹天自身を知っていた須山計一が、こうした間違いを起こすとは考えにくい

からである。

ここで強調しておきたいことは、混同が生じた理由がある。それは、柳田國男（1875年-1962年）が、南島はすべて「アマミ」と呼ばれていた⁽¹⁹⁾ という記述が、手がかりとなろう。それにしたがえば、宮古もアマミの一部となる。その言葉を日本本土の南にある島に関して呼ぶとすれば、奄美大島を連想させる。

下川貞文その人なりを知る手始めとして、まず「下川家系圖」を以下で紹介したい。

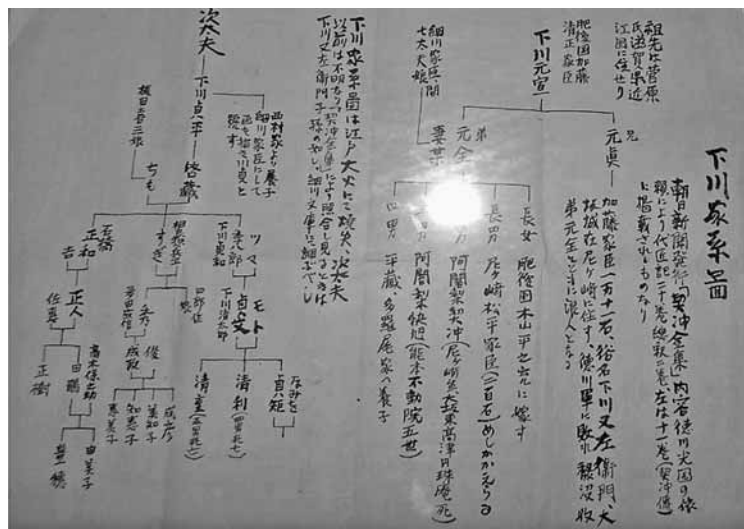


写真3 下川家系圖（川崎市市民ミュージアム所蔵）

この系図は、伯父の石橋正和（生没年不詳）が作成した。その後、凹天が加筆したものである。当時、家系図を知るとは、結婚や就職などとも関係していた。また、自分がどこから来て、どこへ行くかというアイデンティティに関わる重要な問題でもあった。この家系図によると、下川家の始祖は滋賀県近江国在住の菅原氏であり、加藤清正（1562年-1611年）に召し抱えられて肥後國に移り、加藤家改易後は、細川家の家臣になったという伝承が判明する。「江戸大火」をはさんで契沖（1640年-1701年）までさかのぼるあたり、これは偽系図の公算大だが、下川家に、こうした伝承があったのであろう。

次に、下川貞文については、『平良市史』に次のような略歴がある。

「下川貞文 しもかわ・さだふみ 一八五八（安政5）年6月24日～一八九八（明治31）年12月26日 教育者。熊本県に生まれる。一八七六年（明治9）年十八歳で教職に就く。八一年来県、首里で半年ばかり巡査をしたあと教職に戻り、一八八四年六月平良小学校に転じ、残る生涯を宮古の子弟教育に貢献する。八八年六月大浦分校、九二年七月新里小（現在の上野小）につとめたが、九二年一二月病死した。所謂旧慣温存期藩

吏を中心とする士族層は新時代を歓迎せず、普通教育を拒否、言語風俗習慣ともにいちじるしく異にするなか、熱心に父母を説いて通学を奨励している。立津春方、富盛寛卓、仲松恵知らもその薫陶をうけた教え子。同僚、教え子らは追悼会を催し墓碑を建立している。享年四十」⁽²⁰⁾。この記述に基づき、当時の時代背景にも目を配りつつ、貞文の生涯をおっていきたい。熊本県に生まれ、幼名が清太郎であった貞文は、地元で18歳の時に、教員になり、その後、23歳で来沖する。最初は、沖縄本島で半年ほど巡査を勤めた。次に一年半ほど首里西小學校で教員になる。ボーダーインクの新城和博（1963年-）氏の調査により、この小學校は現在の琉球大学教育学部附属小學校の源流にあたる事が判明した。『沖縄教育』31號（沖縄教育会、1908年）の1頁に「明治十三年十月、首里に東西北の三小學校を置く」とある。ただし、同雑誌の3頁には、「十一月」に「寒川村に西小學校」とある。このあたりの日にちに揺れは、今後の課題としたい。

その後、貞文は来宮し、平良小（現・北小學校ならびに平良第一小學校）、西邊小學校大浦分教場（現・西辺小學校）、新里尋常小學校で、明治新政府による教育制度に抵抗する宮古の士族層に通学を勧める。こうして島に近代教育を普及することに努めながら、宮古で十五年半ほど過ごし、妻のモト（生年不詳-1932年）、後の凹天となる貞矩、弟の清利（生没年不詳）、清重（生没年不詳）という家族にも恵まれた。当時、宮古では、琉球王府、明治新政府、清国の思惑が入り混じり、はては内政干渉に近い欧米諸国の態度もふくめ、島の社会変革期であった。琉球縣が設置されたにもかかわらず、旧慣温存政策の継続、宮古・先島諸島の領有をめぐるの各国の駆け引き、小學校制度の度重なる変更、人頭税廃止運動などが、貞文の宮古時代と重なっている。貞文のすぐれた人格や熱心な活動により、島に新しい教育も浸透したが、四十歳の時に病死する。

貞文と凹天の生き方には、大きな親和性が感じられる。父子の職業は違っていても、時代の先駆者であったと同時に、そのまなざしはたえず庶民に向けられていた。

そこで、貞文について述べる前に、凹天について俯瞰したい。凹天には流行風刺漫画家、運動漫画家、教育的漫画家を始めとして様々な顔があったが、彼の作品には、たとえ風刺であっても庶民へのあたたかい視点が認められる。

まず、凹天は、大正デモクラシーからエロ・グロ・ナンセンスを体現した風刺画家であった。北澤樂天（1876年-1955年）や岡本一平等当時最先端の風刺画家と交流し、漫画を世に知らしめた東京漫畫祭や、初めての漫画家団体である東京漫畫會、その後裔団体である日本漫畫會に参画している。日本漫畫會の最大の功績は、関東大震災（1923年）を漫画というメディアで、その惨状を世間に訴えたことである。

次に、運動漫画家としては、無産階級運動時代に顕著だが、下層階級への共感を常に持っていた。風刺週刊誌『ジンプリチスムス』のイラストレーター兼風刺画家であるトーマス・ハイネ（1867年-1848年）や、同誌で風刺画を描いたオラフ・レオンハルト・グ

ルブランソン（1873年-1858年）などから学び、柳瀬正夢（1900年-1945年）などの漫画家やプロレタリア運動に関わる文化人と親交を結んだ⁽²¹⁾。日本漫画家聯盟やその関連団体での活動は、その一端である⁽²²⁾。

最後に、教育的漫画家の功績としては、熱心に後進を育てた。このうち慧星会での活動については、これまでの研究では扱われていないため、本論で、多少取り上げておく。この漫画家団体はこれまで、凹天が始めたと考えられていたが、実際には、山口豊専（1891年-1987年）である⁽²³⁾。日本画の勉強会であったはずが、宴会が主になっていた。

例えば、凹天の高弟である森比呂志（1912年-1999年）は、次のように述べている。

「慧星会というのは東京毎夕新聞の日曜マンガの編集をしていた下川凹天先生がその夏の投稿者を集めて懇親会を毎日ひらいていた。下川先生の豪徳寺の自宅や、この出雲亭でよく会合を持った。私はまだホンの賭けだして、そのとき赫赫と頭角をあらわしていた黒沢はじめ、益子しでを、石川進介、原田巷生らの諸兄にはとても近づけない。十八才の田舎ッポで誰ともロクに口をきけない。いつも隅のほうで黙っていた」⁽²⁴⁾。



写真4



写真5

山口豊専邸にある屏風（宮国優子氏撮影・大貫光子氏提供）

慧星会は、第二次大戦後も継続し、一度だけ山口豊専の家で開かれた。写真4は、その時に参加した漫画家によって漫画が描かれた屏風である。そのうち凹天の画に焦点をあてた。時期は、凹天の絵の下に書かれた日付から判断すると、人類史上初の月面着陸が話題となった1969年11月頃である。裏は、豊専による揮毫である。なお、孫の大貫光子（1947年-）氏によれば、この屏風や裏にある揮毫は豊専自身の手になるものである。豊専は、二番目の師匠である中山愛山（生没年不詳）のところで住み込みで南画を学んだが、愛山の息子が経師屋を営んでおり、そこで掛幅や屏風、襖、障子の張り替

えも覚えた。しかし、息子の妻である山口君子（生年不詳-）氏も、孫の大貫光子氏もそのことは、ご存じなかった。

こうして多種多様な人びとと交流をしながら生涯をとおして、下川凹天は一漫画家として活動を続けた。新聞社政治部で、政治家や高級官僚、文化人とも知り合い、種々の事情で勤める新聞社などが変わりながらも、凹天は、時代を切り取った作品を発表し続けた。その視点は、常に時代や大衆に向かい、庶民に寄り添った作品を産み出すところにあった。

九歳の頃から絵を描き始めた島出身の少年が東京で青年となり、北澤樂天に最初の弟子として入門する。しかし三度の破門後、また樂天に弟子入りするなど人に採まれつつ、貧困や病苦にも苦しみ、「泥棒！泥棒をしたくとも體が動かない」⁽²⁵⁾とまで追い込まれた時期も過ごした。天然活動寫眞會社からアニメーション制作の話を持ち込まれた時に引き受けたのも、こうした経験が理由の一つであろう。

「無収入で売り買いをやっているところへ凸坊新画帖（現在のアニメーション）の話があり、月給五十円、助手付きというのであるが、何一つ参考にするものもなく、企画もなく、そのうち、ライトで眼を悪くし、入院する羽目となった。作品は芋川椋三等一巻ものである。天活社（今の日活）系の浅草映画館封切りされたのだ。

そこへ、やまと新聞社から似顔の注文があり、引きつづき大坂毎日新聞社、東京日日新聞社からも依頼があって、似顔絵の草分けといったような感じであった」⁽²⁶⁾。

宮尾しげを（1902年-1982年）によると、凹天の処女作『ポンチ肖像』が売れず、それを支援するために服部亮英（1887年-1955年）が、1916年に似顔絵会を始めたのが嚆矢とされている⁽²⁷⁾。『ポンチ肖像』を始め、凹天は同時代の漫画家から一目置かれる似顔絵の名手であった。

東京でこれだけの活動をしつつ、凹天は、みずから「琉球人」⁽²⁸⁾と記した。これは、凹天自身が、どれほど故郷と遠く離れてしまっても、そしてどんなに有名人との交流があっても、故郷である宮古を追想し続けていた証である。

(2) 宮古に渡るまでの下川貞文と赴任当時の宮古の状況について

下川貞文の生涯を入手できる資料の範囲で、詳しくたどりたい。すでに『平良市史第八巻（資料編6 考古・人物・補遺）』の略歴を引用したが、異なる資料では、熊本で「安政五年六月廿四を以って千葉城に生れぬ」⁽²⁹⁾という貞文と同時代人の記録がある。

熊本にあった下川家については、まず『新熊本市史 別編 第1巻 絵図・地図 上』



写真6 下川喜三郎の屋敷があるスレート図（『新熊本市史』54頁）

（新熊本市編纂委員会，1993年）からふれておく。以下に述べることは，熊本博物館歴史担当の木山貴満氏による調査である。

『新熊本市史』から判明することは，文政年間に千葉城坪井川沿いに，下川喜三郎という人物の屋敷があった⁽³⁰⁾。しかし，この人物は，熊本藩の侍帳には載っていない。ということは，細川家の家老である松井，米田，有吉，もしくは細川一門の陪臣であった可能性がある。

なお，熊本博物館には，下川家から古文書が寄贈されており，そこには，下川俊蔵，下川平内，下川達也などの名が載っている。また，下川家資料には，1885年の「御奉公手扣」に下川藤右衛門，次いで下川彦左衛門の名がみえるとのことであった。下川家系圖に出てくる貞文の家柄とは関係がないか，別系統であるのかもしれない。

次に貞文が生まれてから熊本師範学校（以下，熊本師範と略記する）までの経歴を熊本市歴史文書資料館に照会したところ，「熊本市内は明治10年の西南戦争，昭和20年の空襲，昭和27・28年の白川水害により，官公庁・学校含め残っている資料は非常に少ないのが現状です」⁽³¹⁾との回答を熊本資料室担当の名倉淳子氏からいただいた。また，貞文が18歳で勤めた学校について，熊本市歴史文書資料館が所蔵する郷土史関連書籍の各小学校沿革史に下川貞文の名前はなかった⁽³²⁾。しかし，千葉城ではないが，熊本縣で下川と名乗る士族が，六名いた。西南の役での褒賞や処罰などで追記のある下川寿平（旧名：寿兵衛）一栄五郎，下川義貞（旧名：立馬），下川清五郎，下川清（旧名：清太郎），下川平内（旧名：五助）である。このうち，下川家系圖と照らし合わせると，下川清太郎がまさにあてはまる。そこで改めて確認すると，以下のような資料があることを名倉氏からご教授いただいた。一つは，「熊本県公文類纂8-53 有禄士族基本帳」

にある。

元高二人扶持

従前九等官補備隊

改正高拾五斗 下川清

旧名 清太郎

明治五年六月十五日 清と改名

明治七年十二月 第一大区小七区高屋敷百五十二番屋敷士族 下川清（印※）

※印字は、貞文。

確かに、1876年「第一大区小七区」には、高屋敷の他に、内坪井、米屋町尻、千葉城、新道溝外、八百屋尻、堀端六間町という地名がある⁽³³⁾。

もう一つは、「熊本県公文類纂 11-44 戸籍 雑款」にある。

第五区高屋敷居住

家禄三十俵 士族下川清太郎 15歳

中島貫吾姉 継母 31歳

合男一人女一人

明治二年二月別手御鉄砲頭之支配被召加候

屋敷 72坪



写真7 貞文の改名記録（熊本県公文類纂 8-53 『有禄士族基本帳』熊本市歴史文書資料館所蔵）

那覇での辞令を以下に載せるが、当時の風習として、母の実家で生まれたのであろう。しかし、生地を「千葉城」と周囲に語ったのは、15歳の時に「継母」と暮らしているところから、実の父母とは何らかの事情で離れ、千葉城に生まれたが、当時はその近隣にある高屋敷に暮らしていたのであろうか。あるいは、宮古では生誕地の土地勘がないため、宮本武蔵（生年不詳-1645年）の居宅のあったことでも高名な千葉城と周囲に語ったからかもしれない。

次に、貞文が熊本師範に入学した理由であるが、先述したとおりの事情で不明である。しかし、梅原徹（1936年-）は、明治新政府の「学制」頒布後の小学校教員について、次のように述べる。

「府県当局はもちろん、政府・文部省の側に必ずしも確固たる教育政策上の理念がないということは、結果的にいわゆる社会的啓蒙のにない手としての教員の開化的役割の幅、活動療育をきわめて広範囲、また融通無碍のもたらしめたと考えられなくもない。それでなくとも新小学校の教員たちのなかには、旧時代の以来の治者感情の捨てきらぬ士族階級出身者が多かった。はじめから自覚的、主体的に地域社会のリーダー的存在として活躍したことは想像に難くない。寺小屋師匠出身者の多かったことも、そのことと例外ではなからう」⁽³⁴⁾。

教員という貞文の進んだ道は、当時においては、士族階級として珍しくないことが理解される。

ここで貞文当時の小学校教員資格や訓導についての説明を文部科学省のHPから、多少長くなるが引用する。貞文は、宮古時代、小学校の訓導として、そのほとんどを過ごしたからである。

「明治五年の学制には、小学教員は年齢二十歳以上で師範学校卒業免状あるいは中学免状を有するものとしているが、これは目標を示すもので数年の後をまってこれを行なうとしていた。七年七月大約に二十歳以上の者に全科の試験を行ない学力に応じて第一等・第二等・第三等の免許状を与えることとしたが、これを三年限りの証書とした。これが教員資格検定制度の最初であった。十二年の教育令には、一般に教員の資格として、『教員ハ男女ノ別ナク年齢十八歳以上タルヘシ』と定め、特に小学校教員については『公立小学校教員ハ師範学校ノ卒業ヲ得タルモノトス但師範学校ノ卒業証書ヲ得スト雖モ教員ニ相応スル学力ヲ有スルモノハ教員タルモ妨ケナシ』と規定した。十三年の改正教育令には、教員資格として『品行不正ナルモノハ教員タルコトヲ得ス』という規定を加え、また『本文師範学校ノ卒業証書ヲ有

セスト雖トモ府知事県令ヨリ教員免許状ヲ得タルモノハ其府県ニ於テ教員タルヲ妨ケナシ』とする改定を行なった。この規定に基づいて、十四年一月三十一日『小学校教員免許状授与方心得』を定め、小学校教員の検定について規定した。これによって、学力の検定により初等、中等もしくは高等の小学科の免許状を授与し、有効期限を五年にすることを定めた。同年七月八日この規則を改正し、正規の免許状を有する者を訓導とし、一部教科に関する免許状を有する者を準訓導とし、ほかに授業生を置くことを規定した⁽³⁵⁾。

訓導とは、師範学校や、高等師範学校を卒業し、正規の教員免許状を持った職階であった。本来、学制では20歳以上とされていたが、貞文が18歳で教職に就けたのも、学制開始当初では、普通のことであった。

熊本ではちょうどこの頃、明治新政府に対する士族の反乱である「神風連の乱」(1876年)が起きていた。直前の三月には秩禄処分が公布され、熊本の士族層には政府に対する不満が拡がっていた。秩禄処分、廃刀令と立て続けに既得権益を失っていく士族を中心に結成された敬神党は、鎖国攘夷を主張した。新政府の中央一極集中の方針に加えて、近代国家への性急な行程に地方として「否」とであると表明したのである。

他方、政府には熊本出身でありながら神風連と異なる形で、明治新政府と向き合う一派もいた。プロテスタント派の源流の一つとされ、後に「熊本バンド」⁽³⁶⁾と呼ばれることになる青年たちである。政府による近代化は若者たちを取り囲み始めており、例えば1871年には、熊本洋学校に、米人教師リロイ・ランシング・ジェーンズ(1838年-1909年)が招聘された。

しかし、1876年に熊本洋学校の生徒ら35人がキリスト教に改宗したうえで「奉教趣意書」を朗読、全員がそこに署名したことは、熊本で大きな問題になった⁽³⁷⁾。キリスト教禁止令の廃止から三年後の出来事である。その結果、ジェーンズは延期されるはずの任期を切られ、学校は廃校となった⁽³⁸⁾。熊本師範と熊本洋学校は近接しており、同年は貞文が熊本師範を卒業した年でもある。明治新政府が国家として大きく舵取りをしていくなかで、その若者の一人として貞文は学び働きつつ、刻々と変わっていく現場を熊本で目の当たりにしていたはずである。

貞文が卒業した熊本師範は、卒業翌年の1877年に、西南戦争のため校舎を焼失する。翌1878年には通称「植木学校」の同志や自由民権運動家が連帯して、政治結社「相愛社」が設立された。1890年の大日本帝国憲法発布までは、これまで述べたように熊本における明治維新から続く激動が青年を包み込んだのである。その最中の1881年、23歳になった下川貞文は巡査として渡沖した。そして、半年後には、首里西小学校の教員になる。

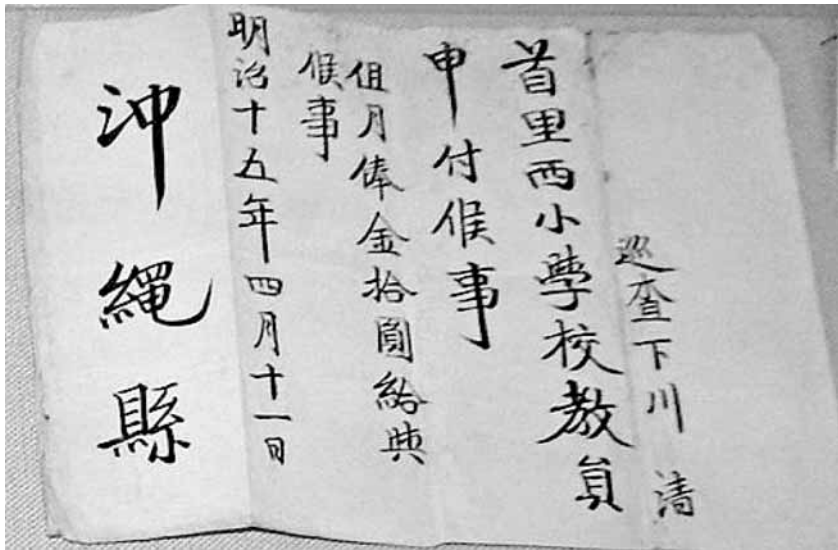


写真8 辞令書「首里西小学校教員」(川崎市市民ミュージアム所蔵)

これはちょうど、1879年の琉球処分直後にあたる。それは、県としての沖縄に、本土ではすでに1872年に始まった学制を広めることでもあった。学制下では、国民皆学の理念の基に、フランス式の学校制度が取り入れられた。小学校に関しては、身分や男女の別なく、6歳以上になると八年の就学が義務づけられた。しかし、こうした中央からの強権的に推し進める手法は、江戸時代の遺風や分権制度が残る地方の実情に合わず、また強制力そのものがなかった⁽³⁹⁾。

貞文が、那覇に来た理由については、熊本での騒擾がきっかけとなったのであろうか。西南戦争(1877年)のため母校は消失した。それとも、琉球処分の流れで、熊本鎮台から那覇に派遣された警察官の後任としてわたくし来たのだろうか。巡查として雇われているということは、教員を一旦、あきらめたのである。

また、来沖の理由としては、当時の教員の生活が苦しかったことを理由に挙げていいかもしれない。

「西南戦争後のインフレーションの時代、給料生活者である教員は生活難にあえいだ。全国教員の平均賃金をみても、明治九年の三円七六銭が一三年には四円三一銭、つまり月額五五銭アップしているにすぎない。ところが米価は明治九年か一升一〇銭余、ちょうど二倍へ急上昇しており、これだけみても、物価高騰と月給アップの格差のあまりの激しさに驚かざるをえない」⁽⁴⁰⁾。

ところが、熊本だけではなく沖縄でも時代は、騒擾の最中であつた。沖縄本島と、宮古・先島諸島の政治的環境はそれぞれに異なり、日本、清国だけではなく世界の国々の

思惑が入り乱れて、揺れ動いていた。1878年9月には、明治新政府は進貢・冊封の停止措置に対し、清から正式な抗議を受けた。これが、宮古・先島諸島のみを清国に割譲しようとする分島問題に発展するきっかけとなった⁽⁴¹⁾。1879年、日本政府は「廃藩置県」の一環として、琉球藩を廃し沖縄県設置を布告する。

しかし、宮古では沖縄県設置から近代日本に組み込まれてはいたが、「旧慣温存」のせいで、新政府と旧琉球王府が支配する二重構造は変わらなかった。沖縄県設置の年、宮古で初めて設置された警視派出所に、下地仁屋利社（1854年-1879年）が、通訳兼小使として採用された。この青年が旧慣温存制度の犠牲になり、殺されるという凄惨な出来事が起きた。宮古では「サンシー事件」として知られている⁽⁴²⁾。

この事件が示すように、警視派出所が新設されたあたりは、島民から怨念の的になっていた。ここは、かつて在番假屋があった場所である。その東西にも東假屋と西假屋があった。假屋とは、島津家が、支配をすみずみまでわたらせるために建てた役所のことである。それを明治新政府が踏襲したと考えられる。二重三重支配を受けた庶民、そして支配層になれなかった宮古士族の怨念が積み重なった場所であった。下地仁屋利社の例を出したのは、宮古における旧慣温存を存続させようとする島の勢力がいかに強かったということを示すためである。

旧慣というのは、仲宗根豊見親（生没年不詳）の時代から宮古から首里王府に貢物をしてきた制度のことである。その制度を利用し、宮古で歴代の按司、親方、上級士族から下役人まで、庶民を働かせ、愛人まで作り、安穏と暮らしていた。ところが、突如として明治維新により、例えば宮古上布など、これまで自分たちが独占していた権利をすべて奪われたことに対抗する運動が、旧慣温存と呼ばれる。



写真9 サンシー事件の舞台

すでに本土では、西南の役によって、こうした反乱は治まったが、沖縄では、置県してからも人頭税が続き、歴史や風俗、言語などが、首里王府や八重山諸島と異なる宮古では、その傾向が顕著であった。

実際、1879年4月には、蔵元の事務整理という名目で、在番や在番筆者、首里王子など各集落の長が在番役の中村朝諒（生没年不詳）宅に集まり、新政府にしたがわないことを誓い合った。その後、島の随所で会合が開かれ、そのための証拠として、血判状が作成された。その血判状には、圧政に苦しめられたはずの平民まで入ったものが残されている。

サンシー事件を例に出したのには、もう一つ理由がある。それは、貞文以前に宮古にあった会所という教育機関である。稲村賢敷（1894年-1978年）は、次のように記している。

「会所というのは、村里別に近隣の児童を集めて学校所の下稽古をする補助機関であるが、その教育価値は決して学校教育に劣るものではない。会所の起源はいつ頃であるか、これを明らかにすることはできないが、公立学校所の設置よりも遙かに以前のことであって、民間教育の任務を担当してきたものであろうと思う。或いは平良内名門の子弟はその材能を選んで沖縄に送って、国学または村学校所の教育を受けさせたこともある。また寇船等が支那と往復する際に唐人との応待の必要等があり、支邦語に通じざる者を養成する必要もあって簡抜して沖縄に送り、通事の稽古を指せたこともある。これら上国して教育を受けた者は、更にその一族および近隣の子弟を集めて漢書の素読および手習を教えたのが会所の起源となったものかと思われる」⁽⁴³⁾。

利社が沖縄本島の言葉ができたのは、上述の会所がきっかけとなった可能性が高い。なぜなら、利社を生んだ下地家は、サンシー事件以前には、どの本をひもといても登場しないため、下級士族であったことが推察されるからである。

このサンシー事件の年、日本は学制を廃止し、第一次教育令が制定された⁽⁴⁴⁾。この教育令の肝要な点は、地方の実情に合わせて、アメリカ式の自由主義的教育を採用したことにある。就学期限を緩め、中央集権的な学区制を廃止し、町村ごとに学校を設立できるようにした。公立小学校については、修業年限を八年とし、四年まで短縮してもいいことにした。

サンシー事件翌年の1880年には、明治新政府が清国に宮古・先島諸島の割譲を申し出て、いわゆる琉球三分割案が提案されるが、翌年、清国側の拒否のため、この提案は不調に終わっている⁽⁴⁵⁾。

1882年、沖縄縣第二代の県令となった上杉茂徳（1844年-1919年）が宮古を視察しており、人頭税に苦しむ庶民の実情を知った。

「宮古島では、貢納ができればどんな貧乏人であっても、困窮者とはいわない。衣食住の費用も内地と異なり、衣は芭蕉布のみで、食はイモに過ぎず、住まいは膝をまげて入らなければならないほど小さい。このような地域性であるから貧富の差があっても内地の感覚で捉える必要はない。試しに貧富の度合いを聞くと、富豪は貢納のほか米粟二十俵位があり、衣装は男にして三枚位、女は五、六枚を有する者が豪勇といっている。（士族は別）下等の者は米粟二、三升で、男女の衣類はおのおの身に着ける一枚あるのみで、他に着替えがない」⁽⁴⁶⁾。

1893年には井上馨（1836年-1915年）の命を受けて笹森儀助（1845年-1915年）が調査に宮古・先島諸島を訪れた。笹森は、翌年の1894年に『南島探験』で、宮古について実情調査を著している。この中で儀助は「旧慣温存」政策は身分制度に問題があることを指摘し、特に宮古特有の名子制度について批判している⁽⁴⁷⁾。この著作が、人頭税という旧慣温存政策による宮古・先島諸島の庶民の苦しみを広く世に知らしめ、その廃止運動の大きなきっかけとなった。笹森は、平民が名子制度により重税となっていることを世論に明らかにすることで、人頭税の廃止、旧慣温存廃止を訴えた。

(3) 下川貞文の平良小を中心とした宮古での活動について

貞文が1881年来沖した翌年は、宮古でちょうど平良小の前身である旧南北校で普通教育が始まった時期にあたる。上杉県令の実情視察に基づき、平良小が宮古で始まったのである。もっとも旧慣温存はそのまま、この混乱の最中、1884年6月に下川貞文は那覇から、平良小の訓導として来宮する。

ここから貞文の宮古の生活について述べる。彼が宮古で行ったことはまず、平良小を小学校として整えることであった。北小学校の歴代校長に下川貞文が載っているのも、すでに平良小に勤めながら、「小學教場」、ないし会所もめぐっていた可能性があるからかもしれない。貞文以前の島における教育は、『宮古庶民史』に詳しい。

「子弟の教育には、はじめ島内にその施設がなく、名門の子弟で好学の者は中山に留学して国学で儒学を修めて帰るだけであったので、文政三年（一八二〇年）にはじめて島内に公立学校所を設けて平良士族の教育機関とした。これ公立学校所のはじめで場所は現北小学校の南隅にあったということである。はじめは平良市内

士族の適当な者を選んで学校所筆者とし、読書、手習、算盤を教え、また小学六巻と四書を教えたが、のち一八四一年には中山から久米人の講談師匠が派遣されることになり、その下に学校所筆者六名（南北両校になってから十二名に増員）が任命された。生徒は平良五ヶ所の士族子弟で、八歳から十四歳までの者の者を入学せしめ、小学四書、古文神宝、五経の素読を教え、十五歳以上になると師匠の講談を聴講させた」⁽⁴⁸⁾。

明治新政府による教育の始まりについての記述もある。

「明治八年になって現北小学校の東北隅に当る位置に北学校が設置されて学校所は二ヶ所となり、明治十五年、新教育の実施に至ったのである」⁽⁴⁹⁾。

貞文が赴任してから死去するまで宮古教育界に貢献したことは多岐にわたるが、本論では、平良小に赴任してすぐに行った二つについて述べておく。

一つは、平良小の改築ともう一棟の新築である。貞文に習った立津春方（1870年-1943年）は、以下のように述べている。「又、今の平良尋常小學校も先生の御設計によりて出来たことも能く記憶して居ります」⁽⁵⁰⁾。

確かに『北小学校百年』（北小学校創立百周年記念事業期成会、1983年）には、一八八五（明治十八）年の項目に、「旧在番筆者仮屋（現宮古支庁敷地）瓦葺一棟を改修し、茅葺一棟を増築して移転する。訓導下川貞文ほか職員六人、生徒一三五名」⁽⁵¹⁾とある。

もう一つは、島の子どもを学校に通わせることであった。これも貞文の教え子の一人である富盛寛卓（1880年-1941年）は、「明治十七年六月を以って宮古島平良小學校に就職せられぬ。當時島民未だ教育の何者たるを辨へず、否、啻に辨へざるのみならず、學校を厭忌し、教員を忌嫌し、加うるに言語を異にし、風習を異にする等、當時教育者の困難なりしこと、追想するに餘りあり。此時に當り君能く一身を其職に投じ、東奔西走教育の必要を説き、懇切慈愛以て子弟を訓誡せられしかば、頑民も終に悟る所ありて日に月に就學兒童の數増加し、教科亦日に月に歩を進むに至りぬ」⁽⁵²⁾と述べている。

下に掲げた写真10の表は、貞文が宮古に赴任した前年からの学齡期児童数と小学校に就学した児童数を示している。この「学事統計表」⁽⁵³⁾は、沖縄県の各地方別に、沖縄私立教育協會事務所により開催された1885年12月の常集会で発表された。貞文が、平良小に赴任した翌年から、就学児童数が激増していることが、ここからもはっきりとする。ちょうど宮古は、首里王府や八重山諸島と異なった状況下、すなわち、サンシー事件に象徴される中央への反発の激化が始まったため、学齡期の児童数の分母が判明しないが、他の地方のデータと比べると、就学児童が大きく学齡期児童比で伸びている。

縣下各地方學齡兒童總數 至明治十七年																			
合	中	久	宮	八	國	島	那	首	地	合	中	久	宮	八	國	島	那	首	地
計	頭	米	古	重	頭	尻	那	里	方	計	頭	米	古	重	頭	尻	那	里	方
1775	350	220	130	100	150	120	80	100	100	350	220	130	100	150	120	80	100	100	
1780	360	230	130	100	150	120	80	100	100	360	230	130	100	150	120	80	100	100	
1785	370	240	130	100	150	120	80	100	100	370	240	130	100	150	120	80	100	100	
1790	380	250	130	100	150	120	80	100	100	380	250	130	100	150	120	80	100	100	
1795	390	260	130	100	150	120	80	100	100	390	260	130	100	150	120	80	100	100	
1800	400	270	130	100	150	120	80	100	100	400	270	130	100	150	120	80	100	100	
1805	410	280	130	100	150	120	80	100	100	410	280	130	100	150	120	80	100	100	
1810	420	290	130	100	150	120	80	100	100	420	290	130	100	150	120	80	100	100	
1815	430	300	130	100	150	120	80	100	100	430	300	130	100	150	120	80	100	100	
1820	440	310	130	100	150	120	80	100	100	440	310	130	100	150	120	80	100	100	
1825	450	320	130	100	150	120	80	100	100	450	320	130	100	150	120	80	100	100	
1830	460	330	130	100	150	120	80	100	100	460	330	130	100	150	120	80	100	100	
1835	470	340	130	100	150	120	80	100	100	470	340	130	100	150	120	80	100	100	
1840	480	350	130	100	150	120	80	100	100	480	350	130	100	150	120	80	100	100	
1845	490	360	130	100	150	120	80	100	100	490	360	130	100	150	120	80	100	100	
1850	500	370	130	100	150	120	80	100	100	500	370	130	100	150	120	80	100	100	
1855	510	380	130	100	150	120	80	100	100	510	380	130	100	150	120	80	100	100	
1860	520	390	130	100	150	120	80	100	100	520	390	130	100	150	120	80	100	100	
1865	530	400	130	100	150	120	80	100	100	530	400	130	100	150	120	80	100	100	
1870	540	410	130	100	150	120	80	100	100	540	410	130	100	150	120	80	100	100	
1875	550	420	130	100	150	120	80	100	100	550	420	130	100	150	120	80	100	100	
1880	560	430	130	100	150	120	80	100	100	560	430	130	100	150	120	80	100	100	
1885	570	440	130	100	150	120	80	100	100	570	440	130	100	150	120	80	100	100	
1890	580	450	130	100	150	120	80	100	100	580	450	130	100	150	120	80	100	100	
1895	590	460	130	100	150	120	80	100	100	590	460	130	100	150	120	80	100	100	
1900	600	470	130	100	150	120	80	100	100	600	470	130	100	150	120	80	100	100	

写真 10 『琉球教育 3 号』（復刻版：州立ハワイ大学，西塚邦夫編『琉球教育第一巻』1980 年，64 頁-65 頁）

下川貞文は、宮古の小学校において、学校建築，教授法，教える内容，児童への接し方や家庭訪問などを最初から始めたと言って過言でないほど，宮古教育界にとって大きな存在だったのである。

貞文の人となりや仕事ぶりを立津春方は，生徒の立場から次のように活写している。

「先生は斯く私が我儘の巨魁たることを能く知っている居られたのだが，決して怒り給ひしこともなく，又叱り給ひしこともなく，吾々の愚を察せられて，益々懇切に導かれた故にやう〜吾々子弟は先生の特に徳に感化するやうになつたのである。私の如きは學校に毎日出ると，あまりに世人が嘲弄する故，人目を忍び父にかくれなどして久しく先生の自宅教授を受けたのでありますが，當時餘程菜園が好きであつて，時には菜園にありて鋤を持たれ，御手は土に塗みれながらも，私が見ると，直に御手を洗われ衣服をかへられて教えられし後に，復び園に入らるゝといふ有様でありました。私のご遠慮申上げて中々許されなかつたのであります」⁽⁵⁴⁾。

こうして，貞文は島にとけこんでいったのであろう。

もっとも教員の生活において，家庭菜園を作ったりすることは，本土の地方でもふうにみられた光景であった。1883 年度の教員料金表に関して，教員の給与が実際に生活するのに足りたかどうかについて，海原はこう述べる。

「当時はまだ，地方では自給自足的な生活のスタイルが一般的で，諸種の職業に従事し，報酬を金銭で得ていた人びと，つまり農業以外の職業人も大なり小なり田畑との関係をもっていた。米を作らなくても，また僅かな二十歳であっても自らの家

で食べるくらいは自給する。出来上がった衣服を買うのではなく、蚕をかい、糸をくり、機をおって自給することなどは、教員をふくめてこのころの人びとの生活にみられた光景である。今日のサラリーマンのように、収入のなかから高い税金、各種の保険料を天引きし、家賃はもちろん、電気や水、極端に言えば空気まで買い、それこそ昼夜をとわず生活全体を一定の金銭的収入で支えている場合とは、ほとんど比較を絶している」⁽⁵⁵⁾。

貞文自身の私生活に起こった平良小時代の大きな出来事は、二人の息子が早世した後、のちに凹天と名乗ることになる貞矩が1992年5月26日に生まれ、元気に育ったことであった。

「私の兄が二人有つたのですが、私の兄は二人共早世して三度目に私が生まれたのですが三度目に奇怪な顔がまへをした私が生まれたので此類なら大丈夫と両親は喜んだ位ひです。早世した二人の兄が余りに美男子だつたからです。子供の時の思出では夢の様です。南國の一孤島の御伽噺を思出します小學校の廣い中庭で生きた鷹を玩具にして遊んだ事往來を馬に乗つて父に乗せられてハイ〜どう〜と行くに道行く土人がバタ〜つと往來土下座して『先生様』と手を合わせて拝んだ事や、琉球焼酎を五つ六つの時から飲み習ってお婆さんと一処に酔つばらつて居る処を父に目かつて叱られた」⁽⁵⁶⁾ ことを記している。

以下の漫画は、鈴木良治（1886年-1931年）が、「凹天三歳の時山羊に襲わるの圖」という題で『ポンチ肖像』に描いた貞矩である。



写真11 鈴木良治「凹天三歳の時山羊に襲わるの圖」(『ポンチ肖像』1916年、磯部甲陽堂所収)

貞矩が生まれた場所は、かつて住屋御嶽と呼ばれた。ここには当時、平良小の教員宿舎があった⁽⁵⁷⁾。このあたりは、サンシー事件で掲げた地図で示したとおり、宮古の行政の中心地であり続けた。1976年、警察署新築工事にともなう発掘調査で遺物が見つかったことから、住屋御嶽遺跡と称された。しかし、その後の各種工事、試掘などから遺跡の範囲が広範囲にわたっていることが判明し、『御嶽由来記』の「志れま」や『在番記』などの「尻間」にちなみ、「住屋遺跡（俗称・尻間）」と改称された。現在、住屋御嶽、尻間御嶽と書かれた石碑もあり、事情を知らないと混乱する。現地では、通常、根間御嶽と呼ばれている。筆者が仲宗根将二（1935年-）氏に聞いたところによると、御嶽や拝所などは、本来、固定して考えるべきではなく、消えては生まれる存在とのことであった。この住屋御嶽に関しては、慶世村恒任（1891年-1929年）著『宮古史伝』に、継子いじめの民話が採話されている⁽⁵⁸⁾。

貞矩が生まれた当時、貞文は平良小に勤めていたという凹天自身の記録もある。「私は鹿児島県人だが、生れは沖縄宮古島平良小学校官舎であった。れっきとした教育家の息子である。当時は、今とはまるっきり違って、食事は粟飯と薩摩芋、今でも米の少ない場所である。その代り生徒の親から豚肉だの山羊肉だの届けがあるので食物には不自由しなかった。おやつは砂糖キビ、遊び友達は生きた鷹であった」⁽⁵⁹⁾。しかし、凹天が幼少期の思い出として語っている場所については、例えば、大城亘武の論文では、上掲の漫画が新里尋常小学校での貞矩になっている。貞文が新里尋常小学校に赴任したのは、1892年6月28日である。すなわち、凹天が三歳の思い出として周囲に語ったのは、貞文の新里尋常小学校勤務時代として数字的には合うものの、当時の勤務実態からすると本当はどこか場所であったのか疑問の余地がある。

その疑問点もふくめて、貞文の平良小の後をたどりたい。1888年、下川貞文は、訓導として、平良小と西邊小學校（以下、西邊小と略記する）を兼任する。貞文が赴任直前に西邊小は大浦分教場が完成し、実際には、貞文はそこに勤めることになった。狩俣小學校（以下、狩俣小と略記する）の沿革誌には「本校ハ明治十九年ノ創立ニシテ西邊尋常小学校ト称す 規模狭小ニシテ職員一名譜久村 児童四十五名 校舎ハ僅カ十二坪ナリキ」⁽⁶⁰⁾とある。また「明治十九年創立 西邊尋常小学校ト称し 字狩俣ニアリ 職員一名児童四十五名 校舎ハ十二坪ニ過ギザリキ」⁽⁶¹⁾という別資料もある。ここでは二つの疑問が生じる。一つは、狩俣集落にあるので「狩俣小學校」と呼称してもいいはずであるが、「西邊」という地名が付けられていることである。これは、すでに『百年誌』（狩俣小學校創立百年周年記念事業期成会、1988年）にあるように、平良五箇から北にある方面は、宮古方言でニスと呼ばれていることに由来する⁽⁶²⁾。

もう一つの疑問は、「尋常」の呼称である。小學校が尋常と付けられたのは、小学令（1886年）からである。沖縄県では、1888年からで、それ以前は、平良小のように呼ば

れていた。確かに同年四月十五日の開校時点では、西辺小であった。しかし、同年四月十九日に、宮古で小学校令が公布されると、それにしたがって「狩俣尋常小学校」になったという記録もある⁽⁶³⁾。

もっとも、これは記録の誤りで、狩俣小学校の沿革史では、1891年四月に西辺小が「字狩俣の中央に校地を転じ十五坪の瓦葺校舎を建てる」⁽⁶⁴⁾が八月に全焼。同月、西辺尋常小學校は、大浦尋常小學校（以下、必要がないかぎり大浦小と略記する）と併合され、野田山林に移転する。翌1892年に、西辺小の分教場としてはあるが、狩俣の地に初めて、「狩俣」の名の付いた教育機関である狩俣分教場ができる⁽⁶⁵⁾。

西辺小の最初にあった場所は、ウプヤマカフツと呼ばれた場所である⁽⁶⁶⁾。1886年に開校した。通称で「ウプヤマ学校」と呼ばれた。



写真 12



写真 13

(村下悦子氏撮影・提供)

西辺小の沿革史によれば、翌年、三月十三日に大浦尋常小學校に改称する。先述したように小学校令が公布されてから「尋常」が小学校名に付けられたが、それと矛盾する。つまり、宮古で小学校令が公布される前に、大浦分教場が大浦尋常小學校となることはない。これは、西辺小の沿革史の誤りであり、『宮古教育誌』にも、明治二十四年の項目で、「生徒数激増 校舎七十五坪増築、火災のため校舎全焼す、大浦分教場と併合」⁽⁶⁷⁾とある。貞文が、大浦小に来たのは四月二十七日である。四月三十日に大浦小の開校式が催される。平良小での仕事ぶりからして、下川貞文が大浦分教場を正規の小学校として形を整えるための異動であったことは、想像に難くない。

おわりに

本稿は、従来の沖縄県における初等教育史では扱われてこなかった下川貞文の半生をたどることによって、明治新政府が当時の日本における辺境にまで、初等教育を推し進めた実態の一端を明らかにするものであった。

それは同時に、沖縄県という名称でくくられてしまう中で、宮古が独特の場所であるということも示した。そこで、下川貞文という現在では忘れ去られた一教育者の尽力により、言語も風習も異なった地域でも教育が実現できる可能性を示したことは忘れてはならないだろう。付言すれば、現在の日本語教育や異文化理解教育の源流とも言うべきものが、当時からすでに行われてきたのである。貞文の具体的な教授法や、貞矩が育った場所の特定まで踏み込むことは、紙数の関係でできなかつたが、それは改めて別の機会に論じたい。

最後に、貞文が、教え子からいかに慕われていたかについて、以下の引用をもって本稿を閉じたい。

「故下川貞文氏の墓碑 故下川貞文氏は熊本県の産にして同県の師範学校を卒業し明治十三年の頃本件に來り初め六ヶ月間は首里に於いて巡查を奉職し次の二ヶ年は同西小學校教員に奉職し十六年乃至宮古の小學校轉し爾來同島の子弟を薰陶すること十五ヶ年の久しき孜々怠らざること一日の如く子弟は勿論父兄も大に信用されたりしが去る三十一年十二月不幸にして長逝せり嘗ての氏の薰陶を受けたる立津春方、富盛寛卓友人白井勝之助、執行生駒の諸氏墓碑を建設し氏生前の功績を永く同島に伝へんと欲し廣く全島の有志に謀りたる處賛成者多く四十餘圓の寄附金立どころにあつまりたれば早速牌を鹿児島に注文し、先月廿日に至り建設一切の工事を竣りたるに依り同日盛大なる祭典を執行したる由なるが當日は炎天に拘はらず参列者頗る多く真宗の僧侶白井氏の讀經あり發起者及ひ有志の祭文演説等あり同島に於て未曾有の祭典なりしと云ふ」⁽⁶⁸⁾。

謝辞

この論文を資料収集や情報提供、論文構成に協力してくださった山口旦訓、村下悦子、新城和博、長崎祐子、本村佳世、山口君子、大貫光子、辻朋季、矢倉眞一、塚瀬素世、拓殖大学八王子国際キャンパス図書館員、拓殖大学文京キャンパス図書館員、川崎市市民ミュージアム関係者、仲宗根将二、亡き宮国優子に捧げます（敬称略）。

《注》

- (1) 下川四天著「自叙傳」『ユウモア』新年號 第1號 第2卷（圖書教育研究會雜誌部、1927年）所収 46頁。実際には、第二号にあたる『ユウモア』の正確な頁については、京都国際マンガミュージアム資料担当の渡邊朝子氏にご教授いただいた。
- (2) 「宮古島という呼称は、2005年の市町村合併により宮古島市が誕生してから定着しつつある言い方で、比較的新しい。1317年に島のことを表記した初出である「密牙古」以来、「宮古の人たちはいつの時代でも、自分たちのシマ（土地）について『みやこ＝ミヤーク』と言っていたのであろうということである。大平山（たいへいざん、たいびんざん）、メーク、マー

クもすべて宮古外の人、とりわけ琉球王府側の表現であって、宮古の人自身は言っていないのは明白であろう。今でも沖縄本島の人は、『マークンチュ』、『メークンチュ』、あるいは『ナークンチュ』などと言うのは周知のとおりである。マークがそのように聞こえたということであろう。マークとは、宮古各地の民謡で歌われる『カンチュウ・キャヌ・マーク』を語源とするものと考えられる。こうしていることこそみやこ一まさに豊かな現世を意味している。池間・西原・佐良浜の『マークツツ』も同義語であろう。仲宗根将二著「宮古の地名を歩く(3)」『宮古島市総合博物館紀要 16号』(宮古島市総合博物館, 1912年)所収。146頁。この論文にしたがえば、下川貞文の時代は、宮古と表記したと考えられるので、引用などで「宮古島」と書かれていないかぎり、本論文では宮古に統一する。

- (3) 筆者は、山口旦訓氏に晩年の凹天に尋ねたところ、この時の印象を「まるで仙人のようにみえた」、「もう、ただのおじいさんみたいだったよ」と語った。その感想もさることながら、本文に掲載した凹天の全身像の写真をいただいたことは、思いもよらぬ資料提供であった。筆者が、この写真について、凹天の足の大きさや所作について感想を述べると、山口氏の方から握手をしていただいた。凹天三十代の記録は、「體量十一貫八百(胃病を十二年間やつた結果)身長五尺二寸ぐらゐ、足袋は十文カツキリ」と載っている。下川凸天著「◇肉筆漫畫雑誌か振り出し」『日本一』1巻1号(南北社, 1915年)所収 245頁。現在の基準ではおよそ、体重が40.5kg、身長が157.6cm、足の大きさが24cmということになる。早稲田大学中央図書館の記録では1915年となっているが、内容の記述から判断すると、1919年に刊行されたと考えられる。他の所蔵する大学でも、1919年となっている。
- (4) 1973年1月5日付『東京デイリースポーツ』。
- (5) 宮内まんキチ編『笑誌〈まんが寺〉』(日本漫画博物館まんが寺, 1975年)181頁。この夏期研修についてキッコマン株式会社に照会したが、記録が古いため、確認できないとのことであった。
- (6) 1933年7月3日, 8日, 10日, 11日付『讀賣新聞』朝刊。
- (7) 伊藤逸平著「下川凹天(3)」『日本新聞漫画史』所収(造形社, 1980年)90頁。
- (8) 岡本一平著「漫畫家下川凹天君」下川凹天著『ボンチ肖像』(磯部甲陽堂, 1916年)所収 2頁。
- (9) 下川凹天著「自叙傳」前掲書 45頁。
- (10) 大城亘武著「下川凹天研究(1)——誕生と死と——」『沖縄キリスト教短期大学紀要 23号』所収(沖縄キリスト教短期大学, 1994年)94頁。
- (11) しかしながら、現在でも、平良小を前身とする北小学校のHPには、下川貞文が歴代校長として記録されている。http://www.miyakojima.ed.jp/kita-sho/information/rekidai_kouchou.html (2023年4月20日閲覧) 貞文が載っているのは、当時の宮古の小学校の状況や貞文の活動を考えると、平良小が完成してから、正式に認められていない教育機関もできたかもしれず、また宮古には以前から会所という島ならではの教育機関もあったので、その一番上の立場であった可能性もある。
- (12) 『北小学校百年』(北小学校創立百周年記念事業期成会, 1983年)163頁。及び、「上野小学校百年の歩み」(上野小学校創立百周年記念事業期成会, 1993年)23頁及び53頁参照。
- (13) 山口旦訓・渡辺泰共著プラネット編『日本アニメーション映画史』(有文社, 1977年)9頁。
- (14) 清水勲著「下川凹天(一八九二～一九七三)」前田愛・清水勲共著『大正後期の漫画』所収(筑摩書房, 1986年)77頁。
- (15) 須山計一著『漫画100年』(芳賀書房, 1968年)136頁。及び、須山計一著『漫画博物志 日本編』(番町書房, 1972年)124頁参照。
- (16) 大城亘武著前掲論文同頁。

- (17) 津堅信之著「日本の初期アニメーション作家3人の業績に関する研究」『アニメーション研究』所収（日本アニメーション学会，2002年）8頁。
- (18) 渡辺泰著「日本のアニメーションの黎明——パイオニア3人の肖像」渡辺泰・松本夏樹・Frederick S Litten 共著『にっぽんアニメ創世記』（集英社，2020年）所収 54頁。
- (19) 「アマミは一つの海の国であった。本州ではこれを南の島の名とし、沖縄ではまたこれを隣の島の名としていたことに不思議は無く、そこに住む者そこから来る者をアマミキョと謂ったのも自然である」。柳田国男著『海上の道』（角川フィロソフィア文庫，2013年）97頁。
- (20) 平良市史編さん会『平良市史第八巻（資料編6 考古・人物・補遺）』（平良市，1988年）277頁。なお、『大衆人事録』（帝國探偵社，1942年）には、下川四天の項で、貞文は廣島縣士族、四天は鹿兒島縣士族と載っている。自筆年譜によれば、四天は「原籍地鹿兒島県平良町百十九番地イ号」とある。四天については、母の実家からそう書いたと推測される。貞文については、今後の課題としたい。
- (21) 『ユウモア』第一號（圖書教育會雜誌部，1926年）41頁-43頁参照。伊藤逸平の前掲書にも「下川四天はかなり進歩的な思想を持っていて、社会風刺漫画などでもそうした傾向の作品を描いていたが、特に農民問題には強い関心を抱いていた」とある。伊藤逸平著前掲書 89頁。
- (22) 「共同印刷の争議では、トランク劇場が出勤しただけでなく、『プロ聯美術部』が神楽坂に出張して、街頭似顔絵の即席揮毫をやり、その揮毫を争議団に寄付した。橋浦泰雄、柳瀬正夢、村山知義、下川四天、麻生豊の諸君が、毎晩出張したが、街頭似顔絵描きの先鞭をつけたわけである。「トランク劇場」とは、徳永直（1899年-1958年）の小説『太陽のない街』で活写されている共同印刷争議の際に活動した日本プロレタリア文藝聯盟の別称である。佐々木孝丸著『風雲新劇伝』（現代社，1959年）102頁。
- (23) 横木健二著「山口豊専さんの思い出」『漫画百年』（東京漫画スケッチ会，1987年）所収 24号 29頁。ここでは思い出にとどまっているが、出版されたという意味では最初である。また、『生誕一〇〇周年記念 山口豊専画集』（山口豊専画集編集委員会，1991年）には、1925年のところに「七月 府下南葛飾群小松川町上平井（現在の江戸川区平井）に住居を構える。次いで、日本画を勉強する彗星会を創設して主宰する」とある。頁はない。
- (24) 森比呂志著「女との出逢い」『漫画百年』17号（東京漫画スケッチ会，1980年）所収 16頁。
- (25) 下川四天著「自叙傳」前掲書 46頁。
- (26) 下川四天著「明治大正昭和世相あれこれ」『漫画百年』11号（東京漫画スケッチ会，1974年）所収 19頁。
- (27) 宮尾しげを著『日本の戯画』（第一法規出版社，1967年）227頁。
- (28) 下川四天著「自叙傳」前掲書所収 45頁。
- (29) 『琉球教育 71号』（沖縄私立教育協會事務所，1902年 復刻版：州立ハワイ大学，西塚邦夫編『琉球教育第八巻』1980年）33頁。
- (30) 『新熊本市史 別編 第1巻 絵図・地図 上』（新熊本市史編纂委員会，1993年）54頁-55頁。本文のトレース図は54頁。下川家文書などに関する記述は、本文で述べたとおり木山氏の調査による。
- (31) 名倉氏からの回答メールの一部を引用させていただいた。
- (32) 以下の記述もふくめて熊本市歴史文書資料館総務局行政管理部資料室の名倉氏の調査による。
- (33) https://www.pref.kumamoto.jp/uploaded/life/82485_103911_misc.pdf（2023年6月11日閲覧）。
- (34) 海原徹著『明治教員の研究』（ミネルヴェ書房，1963年）24頁。

- (35) https://www.mext.go.jp/b_menu/hakusho/html/others/detail/1317605.html 「小学校教員」の項目（2023年4月29日閲覧）
- (36) 森岡清美著「人生の道づれ ― 熊本バンド再考 ―」『成城文藝 232号』（成城大学文学部、2015年）所収94頁。
- (37) 前掲書87頁-89頁。
- (38) 前掲書86頁。
- (39) 海原徹著前掲書170頁。
- (40) https://www.mext.go.jp/b_menu/hakusho/html/others/detail/1317588.html 「学生への批判と教育令」の項目（2023年4月30日閲覧）。
- (41) 宮古島市教育委員会編『みやこの歴史 宮古島市史 第一巻 通史編』（宮古島市史編さん委員会、2013年新装版）221頁。
- (42) 「サンシー」という言葉について、慶世村恒任の『宮古史伝』では、犠牲者自身のあだ名ではなく、彼のいた一家のあだ名であったと記されている。慶世村恒任著『宮古史伝』（復刻版：吉村玄得、1976年）253頁-255頁。このあだ名は、明治新政府につくか、琉球につくか、清国につくか態度を鮮明にしないという「三姓」という不信感を表している。仲宗根將二氏は「新時代に賛成したということで、今に至るも“サンシー（賛成）事件」として知られている」と記している。下地仁屋利社が明治新政府に賛成したという意味である。仲宗根將二著『宮古風土記』（ひるぎ社、1988年）29頁。どちらにしても島民全体に衝撃的な事件であったのには変わりがない。サンシー事件の経緯については、平良市史編さん委員会編『平良市史第一巻通史編 I（先史～近代）』（平良市史編さん委員会、平良市、1979年）271頁-275頁参照。
- (43) 稲村賢敷著『宮古庶民史』（復刻版：三一書房、1972年）361頁。
- (44) https://www.mext.go.jp/b_menu/hakusho/html/others/detail/1317588.htm (2023年4月31日閲覧)
- (45) 当時の宮古の様子は『宮古島近古文書』にあり、民族学的な資料としても価値が高い。平良勝保（1954年-）は「目次はなく分類はされていないが『人身売買/寄替模令/金銭物品の貸借』など75条の設問と回答からなる。『明治17年旧慣調査書』と似たような内容で、明治17年の調査はその後も継続されていたことをうかがわせる」と述べた。平良勝保著「近代沖縄における旧慣調査とその背景」『地域研究五号』所収（沖縄大学地域研究所、2009年）23頁。
- (46) 宮古島市史編さん委員会編著前掲書239頁。
- (47) 笹森儀助著『南島探験』（復刻版：沖縄郷土文化研究会、1968年）「御用人夫ノ事ニシテ、何役ハ何人ト丁男ニ割当テ、之ヲ以テ自家ノ雑用ヲ命シ、及ヒ所有ノ耕地迄耕作セシメ、之ヲ現役セサレハ其人夫ヨリ米八俵ヲ取メシメ、内四俵ハ自己ノ所得トシ、四俵ハ完納トシ、以テ薄給ノ補トス。最モ其役ニヨリ死去後ト雖モ、幾代ヲ限り此人夫ヲ給スル故、士族ノ家ニトリテハ益アルモ、平民ニアリテハ段々増シテ困難名状スヘカラサルモノ也」。121頁。
- (48) 宮古島市史編さん委員会編前掲書239頁。
- (49) 稲村賢敷著、前掲書360頁-361頁。
- (50) 前掲書362頁。
- (51) 『琉球教育71号』前掲書33頁。
- (52) 『北小学校百年』（北小学校創立百周年記念事業期成会、1983年）163頁。なお、その前の一八七五年（明治八年）の項目には、「農業実習地に茅葺十坪半の校舎を設け北小学校と称す」とあるが、この場所は現在の北小学校の東北隅にあった。そのため「移転」という文言が入っているのである。なお、宮古教育誌編纂委員会編『宮古教育誌』（沖縄宮古連合区教育委員会、1972年）38頁には、「旧薩在番筆者ノ官舎（瓦葺）ヲ改修シ且つ茅葺一棟ヲ増築

- シテ移転ス 生徒百三十五名 訓導下川貞文他職員六名」とある。
- (53) 『琉球教育 71 号』前掲書 35 頁。
 - (54) 『琉球教育 3 号』(沖縄私立教育協會事務所, 1896 年 復刻版: 州立ハワイ大学, 西塚邦夫編『琉球教育第一巻』1980 年) 64 頁-65 頁。
 - (55) 『琉球教育 71 号』前掲書 33 頁。
 - (56) 下川凹天著「自叙傳」前掲書所収 45 頁。
 - (57) 海原徹著, 前掲書 41 頁。
 - (58) 村下悦子氏の聞き取り調査による。
 - (59) 下川凹天著「明治大正昭和世相あれこれ」『漫画百年』(東京漫画スケッチ会, 1974 年) 所収 11 号 18 頁。
 - (60) 慶世村恒任著『宮古史伝』(南島史蹟保存会, 1927 年 復刻版: 吉村玄得, 1976 年) 16 頁-18 頁。
 - (61) 『百年誌』(狩俣小学校創立百年周年記念事業期成会, 1988 年) 15 頁。
 - (62) 筆者は, 仲宗根將二氏との懇談の折に初めて知った。『百年誌』(狩俣小学校創立百年周年記念事業期成会, 1988 年) 15 頁参照。
 - (63) 在沖狩俣郷友そてつの会編『宮古島 狩俣 100 人の物語 記録に残したい先達』(琉球書房, 2014 年) 451 頁。
 - (64) 『百年誌』(狩俣小学校創立百周年記念事業期成会, 1988 年) 275 頁。
 - (65) 前掲書同頁。
 - (66) 『百年誌』(西辺小学校創立百周年記念事業期成会, 1990 年) 13 頁。ただし、『北小学校』には, 1888 年 3 月 30 日に平良小学校を平良高等小学校と平良尋常小学校とある。このあたりの事情については, 今後の課題としたい。
 - (67) 「明治二四年 児童激增 校舎七五坪増築 火災のため校舎全焼す大浦分教場と合併す」。『宮古教育誌』(沖縄宮古連合区教育委員会, 1972 年) 126 頁。焼失の原因は「ランプの不始末」という記録がある。在沖狩俣郷友そてつの会編前掲書 451 頁。

(原稿受付 2023 年 6 月 16 日)